

2024年度 公募推薦選抜問題 (90分)
B 日程 11月12日(日)

基礎学力テスト

英 語	1～7 ページ
数 学	9～12 ページ
国 語	13～24 ページ

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 上記の科目から2科目選択してください。
3. 解答用紙には、英語・国語(赤色)・数学(青色)の3種類があります。
4. 試験開始後、解答用紙に受験番号と名前を必ず記入し、受験番号をマークしてください。
5. 解答はすべて解答用紙の解答欄にマークしてください。
6. 問題用紙の余白は計算に使用してもかまいませんが、解答用紙を汚してはいけません。
7. 試験開始後、問題用紙・解答用紙に落丁・損傷がないか確認してください。
8. 数学の問題の冒頭には「解答上の注意」が記入されていますので、必ず読んでから解答してください。
9. 解答済みの答案は、2科目重ねて提出してください。
10. 不要になった解答用紙も回収します。
11. 試験終了後、問題用紙は持ち帰ってください。

国語

1 次の問い(問1～3)に答えなさい。

問1 ア～ウの傍線部のカタカナに相当する漢字を、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選
びなさい。 1、2、3

ア 集まったデータをカイセキする。 1

① 斥 ② 隻 ③ 積 ④ 析

イ 昔の方針をケンジして譲らない。 2

① 圏 ② 堅 ③ 賢 ④ 鍵

ウ 格式ある神社のイヨウに感動する。 3

① 容 ② 陽 ③ 様 ④ 用

問2 ア～エの四字熟語の空欄 4、5、6、7 に入る漢字を、次の①～⑨の中からそれぞれ
一つ選びなさい。 4、5、6、7

ア 彼は温 4 篤実な人柄で慕われている。

イ 諸国が合従連 5 して強大な敵に立ち向かう。

ウ まるで勸善 6 悪を絵に描いたような時代劇だ。

エ 熟読 7 味してその書物の内容を血肉化する。

① 玩 ② 合 ③ 懲 ④ 討 ⑤ 厚

⑥ 孝 ⑦ 吟 ⑧ 罪 ⑨ 衡

問3 ア～ウの筆者の著作を、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。 8、9、10

ア 志賀直哉 8

① 『網走まで』 ② 『或阿呆の一生』 ③ 『李陵』 ④ 『晩年』

イ 島崎藤村 9

① 『遠雷』 ② 『夜明け前』 ③ 『驟雨』 ④ 『海と毒薬』

ウ 斎藤茂吉 10

① 『鹿鳴集』 ② 『春泥集』 ③ 『群黎』 ④ 『赤光』

② 次の文章を読んで、後の問い(問1〜6)に答えなさい。なお、Nukabotは、筆者が研究開発を行っている発酵食品の容器の名前で、従来のぬか床に、発酵菌の状態を検知するセンサーや計算機、会話機能などを追加した一種のロボットである。

筆者は、Nukabotの研究において、人間と微生物が相互をケアする関係性を結ぶことが可能か、というリサーチクエスチョンを掲げている。人間同士の相互ケアでさえも難しいのに、人と微生物という、生命の系統発生の観点からしても、かなりかけ離れた種同士のケアの関係を考えることはできるのか。実はこの問いは、モア・ザン・ヒューマン (more-than-human) 研究について学ぶことで醸成されたものである。モア・ザン・ヒューマンとは環境哲学者デイヴィッド・エイブラムが人間以外の生命種によって構成される環世界を指して作った造語だ。転じて、今ではポスト人文知や工学の領域において、^A人間中心主義の軛から脱するために、ヒト以外の生命種全般を指すために用いられるようになっていく。

Nukabotの研究の中で特に参照したのは、環境倫理の哲学者マリア・プッチ・デラ・ベラカーサの議論である。その主著において彼女はケアを人間にだけ可能な行為としてではなく、異なる生命種同士の関係生成の文脈において捉え直している。

モア・ザン・ヒューマンの環世界と「ひとつになる」というダナ・ハラウェイの哲学からインスピレーションを得て、社会的、政治的、経済的な側面を含んだフェミニズムの議論におけるケアの歴史を振り返りながら、プッチ・デラ・ベラカーサは、人に限らず、生命同士が「互いについて考えること、知ることの関係にはケアの観念が必要」であると考えてきた。彼女は、相互ケアの関係がいかにかに生成的、動的、そして進化的かを強調するために、ケアが倫理的、道徳的な命令ではなく「非規範的な義務」を呼び起こすものであると説明している。また、「ケア(の行為)は、その本質がありふれたメンテナンスや関係修復であるというだけでなく、世界の住みややすさの度合いがその中で達成されるケアにかかっているという理由から、私たちに絶え間ない育成を義務づけている」と説くように、ケアとは放っておくと劣化してしまう状態を常に見守ることで、自らの生きやすさを高める行為でもある。

プッチ・デラ・ベラカーサにとって、思いやりのある関係によって生み出される相互依存は、代替的な^Bバイオポリティクス(生政治)を構想するための前提条件である。それは、すべての存在の希望に満ちた繁栄のための日常的な探求の中心に思いやりを置く集団的なエンパワーメントの倫理であり、ここで用いられる「バイオ」(ギリシヤ語ではビオス(bios))とは人間以外の生命を含む共同体としても理解されるものである。そして、この関係が本質的なものであるためには、フューチャーを引きながら、自らとは異なる他者への「好奇心」が必須であるとも指摘する。そのような好奇心の日常における具体的な発現としては、他者に対して“*How are you doing?*”と問いかける行為が挙げられている。それはただの儀礼的な挨拶ではなく、当の他者が「どのような苦しみと向き合っているのか?」という問いの表現であるという。

このような「ケア」の概念の明確化は、プッチ・デラ・ベラカーサが現代農業のケースに焦点を絞って、土壌生態学の研究から「フードウェブ」の概念を引き出したときに、私たちにとつて特に重要になる。「フードウェブ」とは、「生命種同士がどのようにお互いを養っているかだけでなく、ある種の廃棄物がどのように別の種の食料になるか」を理解するための概念である。彼女はこれを「相互依存のウェブ」と呼び、ここでは「さまざまな主体〔中略〕が人間社会とは異なる関係性で互いに必要なものを提供し合っている」と表現する。

土壌の観察から生まれた「フードウェブ」の概念は、何百億もの微生物が共存するぬか床にも適用

できる。乳酸は、乳酸菌がグルコースを代謝する際に発生する廃棄物の一種であり、発酵過程で付加された他の栄養素（ビタミンなど）とともに、人にとっての美味の源となる。また、米ぬかは人間が米粒を加工する際に発生する廃棄物だが、同時に乳酸菌や他の種のバクテリアが同居するための快適な環境にもなる。

プッチ・デラ・ベラカーサは、二〇世紀を通して化学肥料、農薬、遺伝子組み換えなどの技術科学的な土壌管理方法が主流となり、人間と土壌との基本的なつながりが破壊されていることを批判している。彼女は、農業における土壌の集中的な搾取を推進してきたテクノサイエンスの進歩史的な傾向を分析し、人間が「固有の関係性から」土壌と再びつながるための方法論の可能性を議論しているのだ。また、^B人間と人間以外のものとの関係において「ケア」が本質的に重要であることは、科学技術社会学（STS）においても、感性地理学（affective geography）の議論とともに議論されている。

STS研究者のシングルトンとローは、イギリスのCTS（Cattle Tracing System：牛追跡システム）を綿密に批判し、動物管理技術と伝統的な農家が行う牛へのきめ細かいケアを対比させている。彼らは、伝統的な農家の家畜牛に対する経験を民族誌的に描写しながら、動物のそばに静かに立って何時間も見守るといような寛容なケアの反復的な儀式が、CTSのような管理効率を追求するテクノサイエンスの原理において無視されていると主張している。農民はこのような儀式を繰り返すことで、家畜たちの健康状態を深く洞察し、彼らとの情緒的な関係を育む時間に参加しているのである。

感性地理学者のアンナ・クリヴォシンスカは、ブドウの実と「一体化」した彼女自身の体験談を詳細に記述している。畑でブドウを育てる数か月間の経験から彼女は、「魅了」、「ブドウに成る（働く）」、「フォーカス」という三つの発展的なプロセスを抽出し、それを通してエンパワーメントの感覚を育んでいる。最初の「魅了」の段階では人が未知の植物の生理現象を発見し、その後に「ブドウに成る」という意識が労働作業を通して育まれ、最後の「フォーカス」では自己と対象を分かち意識が後退し、ケアの作業に努力を感じなくなる状態が続く。クリヴォシンスカは、土を扱う農民を観察した別の民族誌において、プッチ・デラ・ベラカーサの「フードウェブ」モデルとしての土の考えに沿って、これらの「ケア」の実践が、注意力の学習プロセスを構成すると主張している。さらに、「人間と非人間のエージェントの間の衛生的な分離を曖昧にする」ことで、人間と人間以外の世界を修復しようとするジェイミー・ロリマーの「プロバイオティック・エンバイロメンタリティーズ」という概念を踏まえ、こうした配慮が「人間以外のエージェントに対するケアの必要性を、人間の幸福に関連するものとして認める」倫理につながると主張する。

これらの環境哲学の議論に共通しているのは、プッチ・デラ・ベラカーサが「ケアの時間」と呼ぶ、

X
Y

時間軸を再評価していることだ。これは、現代のテクノサイエニズムの時間観から切り離された時間性であり、「ケアする」という日常的な実践の繰り返しから生まれるものである。そのため彼女は、メンテナンスの行為、情緒的な関係、そして非規範的な倫理性からなる「^Cケア概念の三連要素」を提案している。

（ドミニク・チェン「非規範的な倫理生成の技術に向けて」〔西垣通編〕『AI・ロボットと共存の倫理』所収〕による。なお、本文中に一部省略・変更したところがある。）

〔注〕 バイオポリティクス（生政治）—— 個人個人の生命や内面に直接関与する政治的支配のあり方。二〇世紀のフランスの哲学者・ミシェル・フーコーが概念化した。

問1 傍線部A「人間中心主義の軛から脱する」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 11

- ① 人間の都合だけを優先してしか物事が考えられない態度から抜け出すこと。
- ② 人間こそが世界の中心だという考え方を疑えずにいる愚かさを認めること。
- ③ 人間が他の生物より知性的に優れていると信じる固定観念から逃れること。
- ④ 人間しか世の中には存在しないかのようにふるまう傲慢さを捨て去ること。
- ⑤ 人間の幸福のために他の生物を犠牲にしてきた人類の歴史を看過すること。

問2 傍線部B「人間と人間以外のものとの関係」とあるが、筆者はどのような関係性を模索していると考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 12

- ① 人間が有する科学的知識や農業技術を用いて土壌中の微生物をとりまく環境を整えることで、人間が長期にわたって大地の恵みを享受することができるという関係性。
- ② 人間が自らの食べ物を食べ尽くさずに一部を自然に還元することにより土壌を豊かにし、なお一層よい農作物を継続して栽培することができるようにするという関係性。
- ③ 生物学の知識を基盤にした科学技術を用いて土壌を整えて豊かにすることにより、自然から搾取するのではなくむしろ自然に寄与していくことを目指すという関係性。
- ④ ほかの生物のような自然に依存して与えてもらうだけの立場に人間が甘んじることなく、土壌の環境をもっとよくするように整えるといった、人間のみが築ける関係性。
- ⑤ 人間が生きるうえで自ずと出てくる不要物を土壌中の微生物の栄養とし、土壌がまた人が生きるための食べ物を栽培する好環境となるという、相互に与え合う関係性。

問3 空欄 X・Y に入る表現の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 13

- | | | | | |
|---|---|-----------------|---|----------|
| ① | X | 人間以外の生命種だけが生み出す | Y | 原始から長く続く |
| ② | X | 人が作り出さなくては表出しない | Y | 進歩的で直線的な |
| ③ | X | 人から人へ連鎖と受け継いできた | Y | 断続的に循環する |
| ④ | X | 人間だけが創造することができる | Y | 反復的に繰り返す |
| ⑤ | X | 人の好奇心と無関心さが合体した | Y | 広範囲に発展する |

問4

傍線部C「ケア概念の三連要素」とあるが、筆者はこの概念を生かしてNukabotの開発を行っている。本文の出典の他の箇所から引用した次の【文章】と本文の内容を踏まえ、どのような点に生かされていると言えるか。その説明として最も適当なものを、後の①～⑤の中から一つ選びなさい。

14

【文章】

Nukabot はぬか床に生息する乳酸菌や酵母などのグラム陰性菌の多様な活動を監視する。pHや酸化還元電位、塩分濃度、各種ガスの排出量などのデータの推移を見ることが、ぬか床が発酵しているのか、腐っているのかをおおよそ判断できる。誰かが米ぬかを混ぜるべきだとシステムが判断すると、音声でユーザーに警告する。また、「いまどんな感じ？」や、「なにかしてほしいことはある？」といった質問に音声認識で答えることもできる。そして、同居人の味覚を知るために、音声による官能評価も受け付ける。つまり、各家庭において、共に暮らす住人の評価に応じて、時間の経過とともにさまざまな味の好みが育っていくのだ。

Nukabot のデザインの目的は、人間の代わりにぬか床の管理を自動化することでは決してなく、目には見えないバクテリアに対して人間が愛着を抱くことである。

- ① 人間が継続的にぬか床の環境を改善するケアを進んで行えるように、ぬか床の状態についてNukabot と人間が会話に似た音声のやりとりを行い、人間が微生物の状況への理解を深めたりNukabot が人間の味覚の好みに合うぬか床を育てたりすることを可能にしている。
- ② Nukabot がぬか床中の微生物の状態を把握し、人間が問いかければ音声で返答することで、あまり人手をかけず効率的にぬか床を理想的な状態に保てるようにし、人間の好みに合ったぬか漬けを作るといった目的を実現するために、人間がケアを行えるようにしている。
- ③ 乳酸菌や酵母などのぬか床に生息している菌の方からも、してほしいことを人間に音声で訴えられるようにしたこと、ケアが一方通行にならないようにし、また、好みに合わせてぬか床にも変えていけることで、ケアに対する具体的な見返りを実感することができる。
- ④ Nukabot がぬか床の状態を監視し、ぬかを混ぜてほしいなどの警告を出すことにより、人間の側が必要最小限度のケアをすることを可能にし、さらに、人間の味覚に合ったぬか漬けが作れるように、微生物にとって居心地のよい環境を維持していくことができる。
- ⑤ 微生物が求めていることをNukabot が音声で伝えてくれることにより人間が適切なケアを繰り返し行うことができるようになっており、また、人間になお一層愛着を抱いてもらうことを目指し、Nukabot が人間の味覚に合うぬか漬けを作ろうと努力してくれる。

問5 本文で紹介されている研究者に関する説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

15

- ① 環境倫理の哲学者であるマリア・プッチ・デラ・ベラカーサによる『生物が単線的な食物連鎖の関係ではなく、相互に依存しケアし合う関係性にあるという「フードウェブ」の概念』を紹介し、それが筆者のZurkaborの研究開発に寄与した、と述べられている。
- ② 科学技術社会学の研究者であるシングルトンとローが、『家畜に対する寛容なケアを反復して行うことにより、農民は家畜の健康状態に対する洞察を深め、相互の情緒的な関係を構築すること』がCTSの本質だと主張している、と述べられている。
- ③ 感性地理学者であるアンナ・クリヴォシンスカが、『ブドウ栽培の体験から「魅了」、「ブドウに成る(働く)」、「フォーカス」というプロセスを抽出し、エンパワーメントの感覚を育んだ』という体験が「フードウェブ」に通ずるものだ、と述べられている。
- ④ ジェイミー・ロリマーが説いた『人間と非人間のエージェントの分離を曖昧にすることで人間と人間以外の世界を修復しようとするという「プロバイオティック・エンバイロメンタリティーズ」が、プッチ・デラ・ベラカーサの主張を支える、と述べられている。

問6 本文の内容について高校生5人が話し合った。本文の内容に即した発言として適当なものを、次の①～⑤の中から二つ選びなさい。ただし、解答の順序は問わない。

16

17

- ① Aさん…ケアの基本には異質な他者に対する好奇心が必要であるという内容が印象的だったな。自分とは社会的背景の異なる人に対するケアでは、相手の文化的背景や価値観などを理解したうえで尊重することが大切だと述べられていたね。
- ② Bさん…互いに思いやりを持ち依存し合うことで生物同士が生きやすい環境が作られると書かれているね。たとえ相手が人間以外の生物であったとしても、相手が置かれた状態に心を寄せるのがケアの基本姿勢だと筆者は考えているんだよ。
- ③ Cさん…筆者は、時間をかけて繰り返しケアを行うことにより、対象との情緒的な関係を構築することができると考えているよ。だから最新技術を生かしたロボット開発を進めて、ケアをできる人の負担を軽減できるように努めているんだね。
- ④ Dさん…大事な家族やペットといった相互ケアの関係に対しては、世話を負担に思わず、むしろ喜びだと思えるから、それがケアの基本だと述べているように感じたよ。自分のためではなく他者のためという考えが大切だと言いたいんだね。
- ⑤ Eさん…ある意味ケアする相手と自分が一体化した状態になって、ケアのための時間や手間を厄介に感じなくなるのが理想であると考えているのだと思うよ。相手のために何かをすることが自分のための行為にもなるということだよな。

3 次の文章を読んで、後の問い（問1～5）に答えなさい。

群馬県桐生市で織物業を営む新田商店は、太平洋戦争中、国策で事業の縮小を強いられていた。県内の養蚕農家の生まれで新田商店の次男・達夫に嫁いできた芳乃は隠れて絹織物の製作を続けていた。

残暑の厳しい、無風の夜のことだった。

僅かに窓を開けて織物をしていると、離れの玄関戸が激しく叩かれた。ほとんど催眠状態で織りの世界に遊んでいた芳乃は、すぐには現に戻ってこられず、しばし織機に座したまま呆然としていた。

玄関先で押し問答するような声が響いたあと、廊下を渡るきびきびとした足音が近づいてくる。音の主は、誰何する前に姑だと知れた。

引き戸が乱暴に開けられ、かつが戸口に立った。背後には、達夫が起き抜けの姿で戸惑っている。

「朝になったら婦人会が来ます。ここにあるものを全部、燃やしなさい」

窓からごく弱い光が差し始めた。浮かび上がったかつの顔は青ざめている。無言で動けずにいる芳乃に、ついに鋭い一声が上がった。

「聞こえなかったん？」

「母さん、一体どういうことなん。せめて説明してもらわないと」

「説明してほしいのはこっちのほうです。皆がもんで辛抱しているこの非常時に、のんきに正絹の反物を織るなんて一体どういう「見」なん？ この私の目と鼻の先で、新田商店の嫁が世間様からそしられるようなことをするなど、前代未聞の大恥です」

「もしかして誰か、婦人会に漏らしたん？」

達夫の問いかけに、芳乃は「X」顔を上げた。誰か、といっても、機織りのことを知っているのは、達夫と芳乃、それに清子くらいである。

「すぐそばで仕えている女中から恨まれるとは、普段からの心がけも知れるいね」

「清ちゃん、なんですか」

このところギクシヤクとはしていたが、この苦難の時間が過ぎ去れば、もとの清子に戻ってくれれば希望を抱いていた。いや、抱いていたかった。しかし時代の課した試練が、芳乃の知っている清子さうとうに変容させていたのだ。

「懇意にしている意匠師の奥さんが使いをよこしてくれたん。あんたの道楽に巻き込まれて新田商店まで危険に晒すことは許しません。染料も糸も、一旦庭に埋めるなり、山に運ぶなりして必ず燃やしなさい」

かつがずいっと近づいてくる。パン、という乾いた音に遅れて、頬を痺れに似た痛みが走った。

「さっさとやるん！」

怒鳴られ、ようやく我に返って立ち上がる。

達夫が、芳乃とかつの間に入った。

「それまでだ。とにかく、隠せるだけ隠さない」と

綿につづいて絹も指定生産になることを見通し、芳乃は実家から大量に絹糸を確保し、様々な色に染め上げていた。

上州一帯で神としてあがめられる蚕蛾の吐き出した糸を、山が生み出す命の色を移したそれらを、かつは本当に燃やせと言ったのだろうか。正絹が人絹に取って変わられる前から、この桐生の街で生きてきた姑がである。

気がつくど芳乃は達夫を押しつけ、大量の絹糸を一束ずつ指さしながら声を発していた。

「これは紅花、これはブナの木、こっちはヤマモモ、それにこれはアセビ、他にもイチヨウに、紅葉に柳に赤インゲンに、これは、義姉さんの着物を染めた時の蘇芳。こっちは、お義父さんが好きだった藍です。まだまだあります。どれも、山の草木からもらった色です、命です」

「何が言いたいん？」

「絹糸は、新田商店を産んで育ててくれた母親みたいなものなんじゃないん？ 新田商店だけじゃない。桐生だって、絹糸も織機もなしで、いったいどうやって生きていくん？」

嫁から姑へではない、桐生の女から女への問いだった。

しばしの沈黙のあと、まなじりをぎりぎりとり上げていたかつが、ぶうと息を吐き出した。

「その絹糸がどれほどの出来か、わからない私だとも思うん？」

気丈な姑が、ついぞ見せたことのなかった憂いの色を瞳によぎらせた。絹糸の束に近づき、太い指先が慈しむように艶やかな表面をなぞる。

「この家に嫁いでから、死に物狂いで店を守ってきたん。大会社だ、桐生の顔だと言われても、一晩だって枕を高くして眠れたことはなかった。特に、西陣には負けたくなくてねえ」

山の端からいよいよ強く朝日が漏れ出すと、かつはごく自然に絹糸を引き寄せ、光から守った。

「西に西陣があるなら、東には桐生がある。絹の歴史だって負けやしない。あつちが千四百年ならこつちも千二百年。この街が、八丁燃糸機やらジャカード織やらを取り入れて桐生織を発展させていったんはあんたも知ってるでしょう」

「大人達から聞かされて育ちましたから」

伝統だけにしがみついていたら、今の桐生はなかった。桐生人なら誰しも、それこそ皆、自分の手柄のように語る。

「だから美代子が嫁に来て、いかにもあつちが本家本元だっていう態度には我慢ができなかったん」

「お義姉さんが？」

芳乃の反物を手放して賞賛してくれた義姉の姿とは、なかなか結びつかない。

「うちのほとんどの儲けは人絹のものでしょ。それなのに、偽物はよう好かんって言うてね」

山の木々に似た深碧の束を一つ取り上げ、かつがほうと息を吐き出した。

「人絹には出せないね、この深みは」

やがてこちらに転じた瞳からはもう、憂いの色は消えていた。

「あんたと美代子が二人して出入りしていた蔵に、隠し階段があります。二階へ上がって、糸や反物を運べるだけ隠しなさい」

先ほど頬を叩いたのと同じ節くれだった手が、鍵を差し出してくる。

「これは階段を下ろす鍵です。棒の先につけて回すん。達夫、やり方はわかるいね？ さあ、二人とも急いで」

何度も頷いて鍵を預かり、達夫と二人がかりで、包めるだけ絹糸を風呂敷に包んだ。また夏を引きずったままの蒸し暑い空気をきって、夫婦で台車を押す。

汗がしたたる。昨日死に損ねた蟬が鳴き始めている。

気づけば、いつ婦人会が抜き打ちで訪れてもおかしくない時刻になっていた。

蔵に向かつて最後の荷物を運びながら、とある疑問が一条の朝目のように芳乃の胸に差し込んできた。

なぜ、かつは隠し階段の鍵など持っていたのだろう。まさかいつも持ち歩いているわけでもないだろうに。

もしかしてあの姑は、すべて承知だったのではないだろうか。芳乃が夜な夜な糸を染め、織物にいそしみ、正絹の着物を仕立てていたことを。知った上で片目を瞑り、見逃してくれていたのではないか。

今という時の言い知れぬ気味の悪さを、与一亡き今、息子達とともに店の矢面に立つかつこそが誰よりも痛切に感じ、織機のたてる音を、桐生の音を守ろうとしてくれていたのではないか。

朝日に映える山の緑は染めがたいほど濃く、鮮やかだ。まだ満足に出せたことのないあの色も、あの色も、今度こそ絹糸に移して織りたい。そんなごく素朴な欲求さえ罪となる日々。おかしいのは自分と、世間と、どちらだろう。

これから迎える大日本婦人会との対面を思い、蔵から帰る芳乃の足取りは重かった。

(成田名璃子『世はすべて美しい織物』新潮社による。)

(注) 1 人絹——人造絹糸の略。レーヨンなどの化学繊維のこと。

2 八丁撚糸機——水力を利用して一時に大量の撚糸ができるようにした機械のこと。

3 ジャカード織り——立体感のある複雑な模様を織り上げる技術の一種。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の語句の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①

～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。 18、 19、 20

- (ア) 誰何する 18
- ① 誰なのか思案をめぐらす
 - ② 誰なのか声をかけて問う
 - ③ 誰か来たのではと考える
 - ④ 何が起きたのか疑問に思う
 - ⑤ 誰がなぜ来たのか尋ねる

- (イ) 了見 19
- ① ものの考え
 - ② 先の見通し
 - ③ 教育やしつけ
 - ④ 態度の悪さ
 - ⑤ 間違った見解

- (ウ) まなじり 20
- ① 眉の端
 - ② こめかみ
 - ③ 目の端
 - ④ 眉間
 - ⑤ 口元の皺しわ

問2 傍線部A「しばし織機に座したまま呆然としていた」とあるが、この時の芳乃の様子の説明

として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 21

- ① 自分だけのこの愉楽の時間が邪魔されたことはかつて一度もなく、想像したこともなかったため、突然それが妨害されたことに驚き、頭や身体がまだ動き出さないでいる。
- ② 手は織物を織るべく動かしているものの思考は別のところをさまよっていたため、急に戸を叩く音がして我に返ったが、何が起きたのかすぐに把握しきれないでいる。
- ③ 織物という一人きりの世界にもって作業をしていたため、戸を叩く音になかなか気づかず、人がここに来たこととその重大さを理解し対応するのに時間がかかっている。
- ④ 反物を織る作業に没頭してその喜びにふけていたため、戸を叩く音を聞いてもぼんやりして意識が適切に働かず、驚きながらも何も対処することができないでいる。
- ⑤ ひそかに織物をする自分だけの悦楽の世界から、戸を叩く音によって突然引き戻されたため、それが現実の出来事だとは思えず夢の中にいるような気分を引きずっている。

問3

空欄

X

・

Y

に入る表現の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～⑤の中

から一つ選びなさい。

22

- | | | | | |
|---|---|--------|---|-------|
| ① | X | しょんぼりと | Y | 注意しつつ |
| ② | X | おもむろに | Y | 張り切って |
| ③ | X | のろのろと | Y | 無言のまま |
| ④ | X | 不機嫌そうに | Y | ひたむきに |
| ⑤ | X | いぶかしげに | Y | 勢い込んで |

問4

傍線部B「ふうと息を吐き出した」とあるが、この時のかつの心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

23

- ① 勝手な行動で嫁が新田商店の体面を汚そうとすることは許さないと言った自分に対する芳乃の反論の言葉から桐生の女としての気概を感じるとともに、自分自身にも織物や絹糸を愛し慈しむ桐生の女としての気持ちが湧き上がってきている。
- ② 嫁でありながら家を危険に晒しかねない芳乃の勝手な行動に腹を立てる気持ちはあるものの、一方で織物を愛する気持ちや染色の腕前に敬服する思いもあり、芳乃から激しい感情をぶつけられたことで自分の中に葛藤が生まれて苦しんでいる。
- ③ 桐生の女として織物や絹糸の美しさを愛する気持ちは芳乃にも負けない自負があり、新田商店を守ってきた誇りがあるからこそその自分の行動であるにもかかわらず、それを理解しようとせず非難の言葉をぶつける嫁の振る舞いにあきれている。
- ④ 家を守るためには戦時下の国家の方針に従わなくてはならず、今は織機も絹糸も手放さなくてはならないと言いつ聞かせてはいるが、山の命の色を映した美しい絹糸を前に、それを手放すことを惜しむ気持ちがかみ上げてきたことで動揺している。
- ⑤ 様々な自然の色に染め上げられた絹糸ならではの美しさを眺め、それを使って美しい布を織り上げたいという芳乃の心情に触れるうちに、抑えていた桐生の女としての意地や伝統への愛情がこみ上げ、芳乃に対する気持ちに変化が生じている。

問5

傍線部C「とある疑問が一条の朝日のように芳乃の胸に差し込んできた」とあるが、この表現の効果を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

24

- ① 婦人会が訪れるまでいよいよ時間がないという時になって突然、今までの自分は重大な点に気づいていなかったのではないかとという疑問が生じ、それを確認しようにももう取り返しがつかないという芳乃の衝撃を視覚的に描く効果。
- ② やりきれない思いで荷物を運ぶうちに、突如として今までの自分の考えが根本的な誤解に基づいていたことに気づき、真実を把握したことにより、暗く閉ざされた芳乃の心に朝日のような明るい希望が見えてきたことを暗示する効果。
- ③ 姑に従ってきた芳乃が納得しきれないという思いを心中に幾度となく巡らしているうちに、これまで隠されていた真実が次第に見えてきて驚きを抑えきれないという心情を描写し、夜明けのようなその瞬間を読者に印象付ける効果。
- ④ 当初は真実に気づけずに一方的に気持ちをおぶっていた芳乃が、ふとした疑問から自分が見落としてきた人々の本当の姿に思い当たり、今までの自分の言葉や行動を後悔する場面へと転じる瞬間を、比喻を用いて印象的に描く効果。
- ⑤ 今までの自分には物事の表面しか見えておらず、重大なことに気づいていなかったのではないかという疑問を抱いたことをきっかけに、姑の言動の真実に思い至った芳乃の発見や、闇を照らす朝日に仮託して象徴的に表現する効果。